

---

# 短編集やシリーズやらやら

fuki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編集やシリーズやらやら

### 【Nコード】

N1585Z

### 【作者名】

fuki

### 【あらすじ】

もそもそと書いた短編集です。きつと続かないだろうなという意識の元の単なるネタ投下です。話しは繋がってないことが多い。ばつらばらに更新する場所。育つことないバラ撒かれた種が辿り着く先、星屑の街。とかいいつつ、異次元に迷い込んで五歳くらいの子どもになっちゃった女性とその保護者が異世界を渡り歩いて捨てられた種に芽を生やさせる話。

**星屑の街、案内人との出逢い（前書き）**

星屑の街、案内人が参りますので暫くお待ちください。

## 星屑の街、案内人との出逢い

瞳を開けるとそこは、仄暗かった。

私は大きな光輝く大きな川の上に佇んでいた。

果てしなく空が遠く信じられないほど川が近い。

黄の光、赤の光、緑の光が気儘に混ざり合ってシャボン玉のように滑らかに溶け合っては色鮮やかに尾を引いて光芒を描いていき、光輝な川の中、金の魚が悠然と水紋を揺らし私の足下を抜けていった。

どこまでも深い深い光の淵。

闇は底なく、光も底ない。ただそこに広がるだけだ。深淵なる光と闇。

「・・・ああ、」

遠くに見えるのはなんだろうか。光の雫がぽつぽつと落ちて、私は天を見上げた。魚を誘う篝火。精霊に備える灯火。光雨。

どこかで音色が聞こえる。

嗤う匂う泣く蔑む瞋る笑む囁る嬉し惑う祈る包む怒り紡ぐ啼く誇し唄う叫ぶ快くひたひたひたひたと。

見上げたさきの暗闇のなか捻れた朱い月に鳳凰が嗤った。ガラクタばかりの宝箱が如く不思議な世界。チクタクと時計を持った兎が忙しそうに横切って、足下を泳ぐ蛙がぷくぷくと泡を吐き出した。いまだにふる雫の向こう。歪んだ浮船に降り立った三叉鴉が光を囁り、黒猫がはんなりと舞う蝶を追って光の川を駆けた。

ふりつづく光の雫がぽつぽつり。魚を誘う篝火。精霊に備える  
灯火。光雨。嗤う匂う泣く蔑む瞑る笑む啜る嬉し惑う祈る。光に攫  
われてしまうと魂が点滅する。包む怒り紡ぐ啼く誇し唄う叫ぶ快く。  
赤黄青光金の魚朱い月鳳凰時計兎蛙三叉鴉黒猫蝶光光雫雨が歪み捻  
れて聞こえるのはもはや、ひたひたひたひたひたひた。

「星露にあたるのは良くないよ」

降り注ぐ光のまにまに。玉響に、音が絶えて。翳されたのは鳶  
色の一つの古びた番傘。和紙を滑って雫が瞳を見開いた私を避けて  
垂落する。ざわついた聞き苦しい音たちはずっと消えて。柔らかな  
音が耳朵を震わせた。

美しく見えてもそれは全ての終わり、絶えた望み、諦めの雫。  
ここは、そんなモノの辿り着く終着点。ごみのように打ち捨てられ  
たモノがただ鈍く光る星屑の街。星屑たちは、呑み込むのを待って  
いる。

ここで独り光の渦に呑み込まれるのを永遠と待つか、それか今ここ  
で俺に捕らわれるか。

「それでも構わないのなら、着いておいで」

そっと差し出された掌に重なるために伸ばした手が、大きな掌に触

れて。私はその温もりに鮮やかに攫われた。

（意識がなくなる瞬間、ぱりんとひび割れる音がした。）

## 星屑の街、案内人との出逢い（後書き）

案内人、星屑の街より一人ご案内。これより短し様々な世界へとお連れ致します。

## 案内人との関係について1

ばたばたと短い足で廊下を走り、ようやく辿り着いた部屋の前で柔らかにぶにぶにした手を伸ばす。紅葉の手とはまさしくこのような手なのだろうと思いつつも必死にドアノブに伸ばすが掠ることさえもできなくてム、と口をへの字に結んだ。こうなったら。

「・・・よし！」

ぐ、と気合いを入れてドアノブを睨み上げつつ背伸びをした。が、それでも届かなかった。小さい足がぶるぶるさせて諦め悪く必死に扉に手をつけて背伸びをしたりぴょんぴょん飛び跳ねたりしたが遙か遠くにある回転式のドアノブは微動だにしなかった。

それでも諦めず幼子が必死になっている姿はそりゃあ微笑ましい光景だろうよと私の後ろを通りながら笑った他の案内人やトラベラーたちに内心舌打ちしつつ振り返って「べーっ！」と舌を突き出すがそれすらも微笑ましいのか飴を押しつけられた。最初は投げつけ返すぞと息巻いていたが、掌の美味しそうな飴に罪はない。

じいと飴を見下ろして次いでばあっと笑った私に彼女たちは眉尻を下げて頭を撫でて颯爽と去って行った。ふむ、きつと仕事なのだろう。昼から大変なことだ。ってこんなことをしてる場合じゃなくて！ポッケに飴を突っ込んでさっきの不動の扉を小さな手でぽすぽすと叩いた。



「あーんなーいにーんーあーけーてー！・・・つかあける」

「はいはい・・・、っと、おはよイチル」

「おはよじゃないよ、もうお昼だぞ」

がちやりと扉が開いて私はすぐにその小さな扉に身を滑り込ませた。  
「イチル、挟まれたら危ないでしょ」と咎めてくるのは私ことイチルの案内人のノアールだ。名前はないのか、と以前聞いたら案内人だから決まった名前はないよと言われたから勝手につけた。

よいしょ、とノアールにふわっと持ち上げられた私は習慣のように咄嗟にノアールの首に腕を回してバランスを保ち肩口に頬をあててノアールを見上げる。と、ノアールはいつも眼をあわせて柔らかく笑ってくれるのだ。

抱っこされることも勿論だがノアールの破壊力がある笑顔の間近さに慣れるのには大分時間がかかったがもう慣れた。なぜいっぱしの二十歳の女がこうなったのかというのはもう説明してもしたりないくらいだ。

そんなボンキュッボンだったワンダフォーな私の姿はいま端から見て5歳くらいの子もだ。かつての栄光はどこに、と短い手足と寸胴な身体を見下ろして泣き崩れていたらノアールが「前と別に変わらないけどね」と意地悪をいつてきたのはもう昔のことだ。今思い出しても腹が立つ。私はねちっこいのだ。

ふつつつとわき上がった怒りに目の前の茶色の髪の毛を引っ張ると欠伸を漏らしていたノアールはぎょつとしてイテテテと慌てて私の小さな手を追い払った。

ノアールの青い色の眼に涙が浮かんでる。ふふん、いいざまなのだ！とこっそりほくそ笑んだイチルを目敏いノアールが見過ごすことはなく仕返しとイチルの黒髪をぐしゃぐしゃに撫ぜ回した。

「ぐわぐわするから止めるのだノアール！」

「あはははは、細い髪だからよく絡まるねー」

首がぐにゃんぐにゃんと撫ぜる手に振り回されて眼がくるくるする。最初は盛大に反発していたイチルを楽しんでいたノアールだったがぐったりと凭れてきた子どもに慌てて手を止めて顔を覗き込むと顔を青くしたイチルと瞳があった。

「ごめんごめん」

「うつぶ、ふざけるのも良いかげんにしろこのヤロー。お昼ごはんを食べたあとだったらあやうくりバースするところだったぞ」

「そっか、うん。心からリバースしてくれなくてよかった」

「しね」

「ふげっ」

俺の服汚れちゃうからと爽やかな笑みを浮かべたノアールの顎下に頭突きを食らわせ、ばたばたと足をばたつかせ離せアピールをする

とパツと離された手のおかげで地面に足をつけたイチルは腕をくんでぶいとそつぽを向いた。

一瞬『ヤバイ!』と思ったが今のは別に私は悪くない。だけど、やつぱりちよつと不安で顎を押さえて唸ってるノアールをちらりと見上げた。彼は私の恩人なのにと。だけどそれでもわざわざノアールのためにここまで来たのに。小さな手を握ってそつぽを向いたまま口を開いた。

「お、おこられても今のはわたしはわるくないもん!」

ぺいつと戦きつつ吐き出すとノアールはようやく顎から手を放し私と同じ視線になるようにしゃがみ込んだ。けれどそつぽを向き続けるイチルとノアールの視線は交錯しない。

理由もなく一つ零した嘆息に小さくイチルが震えたのに気がついたノアールは仕方ないというように苦笑いを浮かべてそつと、ぼさついた黒髪に手を伸ばし撫でつけると、頑なにそつぽを向いていた視線がそろそろと下に向けられて次いで懲りたように交錯した。すぐさまノアールは優しく笑ってみせる。

「今のは俺が全面的に悪かったし怒ってないから大丈夫。それよりもう昼ならさつさと食べに行こうよ、ね?」

お昼もすつぽかさないように、わざわざ俺をお越しに来てくれたん

でしょ？

続けたノアールにイチルがその通りなのだと、こくんと頷くとノアールは柔らかに笑った。その青の瞳に怒りの色はない。私はほっと安堵の息をついた。

試しにこのねほすけさんめと嫌味を言ってみたが、ノアールは気にもとめない様子でそうだねとやっぱり笑ったまま頷いて立ち上がった。影が翳る。でも、この影は怖くない。だって、

「食いつばぐれないようにしなきゃね、ほら行くよイチル」  
「うん！」

星屑の街で差し出された掌がまたイチルに伸びたから。

思わず破顔してその温かい掌を握りかえした。星屑の街で独りでいた私を攫ってくれたこの温かい掌がどうしたって大好きでしかないのだ。掌から伝わる温もりにふにやりと頬を緩めると足が地面を離れて。ぎゅうつと抱きしめられた。

「ノアールわたしべつにつかれてないから歩いていけるよ？」

「俺が抱っこしたくなっただけ。だからイチルさんは大人しく運ばれてください。分かったかな？」

「はいはいせんせー！」

一瞬、きょとんとしてしまった私を覗き込んだノアールの瞳が悪戯っ子のように煌めいていて。私も元気の良い声で返事をして、そしてまた二人で弾かれるようにけらけらと笑って廊下に出た。

心地よい揺れと、服を伝わる温かさ。そしてほのぼのとした雰囲気のままイチルとノアールは食堂へ向かっていった。

## 案内人との関係について1（後書き）

案内人とトラベラーの一日、朝から昼までをご説明致しました。

## 案内人との関係について2

ノアールに抱っこされたまま食堂に連れて行かれた私は周りからの微笑ましい視線にびっしびしに突きさされた。ええい見るな！私はパンダではないのだ！

むむと睨み付けるが皆一様にして頭を撫でて行く。今はお腹がすいているから許してやる。反抗するきも起きぬのだ。

イチルは、んしょつとノアールの膝の上で身体を捻って座り直す。なぜなら机は大人用に作られていて、今のイチルでは椅子に座っても頭が机から出ないからだ。

ノアールが一回私のお腹に腕を回してずり落ちないようにしてくれた。前に良いとしこいた女がなんでこんな屈辱を受けねばならぬとノアールにくつてかかったが爽やかな一笑に異議が伏せられた。その爽やかな笑みに異議あり。

かちゃ、とスプーンがお皿に擦れる音がして机の上を見ると目の前には黄色いオムライスとサラダとフランスパンが平らな皿に盛りつけられていてイチルは、ぱあっと瞳を輝かせてすぐさま小さなスプーンを手を取った。

戦闘態勢完了なのだぞとノアールを見上げると、ふわっと笑ったノアールは手を伸ばしそのオムライスを小さなお皿に寄せて私が届く所に置いてくれた。

オムライスの断面からとろとろな卵とトマト色のご飯が顔を覗かせ、

恥ずかしいと顔を隠すみたいに湯気がぼわんとイチルの鼻をくすぐった。美味しそうとスプーンを突っ込んで口の中に放り込み広がった味にゆるりと頬を緩ませる。幸せだ。

「ノアール！オムライス美味しいぞ」

「そうだね、はいイチルあーん」

口元につけてこられたノアールの手に私は警戒することなく、ぱかっと口を開いて受け入れた。小さい子の顎でも噛み切れる柔らかめのパンだ。

「てめえも相変わらずだなノアール」

もふもふと咀嚼していた二人が声がした方に顔をあげると紺色のスウェットを着たヤンキーがこっちに近づいてきた。眉なしで釣り目で細マツチョで金髪の頭に刈り込みいれてるからヤンキーって勝手に呼んでいるのだが、案内人ガンドック通称ヤンキーだ。

そのヤンキーが、がたと前の空いている席に腰掛ける。「ようイチル」とガンドックが挨拶してきたから私も「よっ」と頷いた。

ごくんとパンを飲み込むとノアールがすかさず、まだパンいる？と聞いてきたからふるふると首を振ってオムライスに突き刺していたスプーンを口に入れた。おいしい！

「あーああ、ったく案内人もついにロリコン化かア？」

「うっさいな、羨ましいなら素直にそういいなよ。ねー、イチル」



急に自分の名前がでて反射的にぱつと顔をあげたが、オムライスばかりに気を取られて全く持って会話を覚えてない。むむ、そんな呆れたような顔をするなガンドック！私だってやるときはやるのだぞ。ぐつと眉間に皺を寄せ神妙そうにスプーン片手にこっくりと頷くと、ノアールがぶつと噴き出し笑いだした。なにごとだ！ノアールの膝の上に座ってるから振動が直に伝わって、おちてしまふ！慌てて両手を伸ばし突っ張る。

「あははっ、はは！ああ、イチルごめんごめんつぶっ」

ぱつと落ちないように机に両手を伸ばし突っ張ったイチルにすぐさまノアールがお腹に手を回し引っ張りあげる。

お皿に盛られた少ない量のオムライスでも五歳児になってしまった私の空腹だった胃を満たすには充分だった。背中にノアールのお腹がくっついてあったかくてぬくぬくする。

もたれたくて仕方がなかったけど、小刻みな揺れは我慢し難い。でも、なんで急に笑いだしたのだ？

そんな不思議にきょとんとノアールを見上げてみるけどまだ笑い続けていたから答えが貰えそうにない。ならば、と前に座ってるガンドックを見てもガンドックはぼかんとして私を見ていた。眉毛がない。どうしたのだ刈り込み。

二人に無視されたような形にイチルがぶうと頬を膨らませるとようやくガンドックが動いた。額に手を当てる。指の間から見える金色

の眼は、疑心に満ち満ちてイチルを見据えていた。

「なア、こいつ本気でもと二十歳の女なんだよな？見えねえよ、精神的にもろガキじゃねえか」

「ガキじゃないもんうるさいだまれヤンキー」

「ほれみる、ガキだ」

「ガキって言ったほうがガキなんだぞ！」

「まあまあ、可愛いから良いじゃん。それにこれも星屑の街にいたせいなんだしイチルのせいじゃないよ」

「だっつってもこいつが盗られたのは単に体の成長だろうが」

「体に精神が引っ張られてる可能性だってなきにしもあらずでしょう？」

「わたしは見かけは子どもずのうは大人なのだ！」

売り言葉に買い言葉と勢いづいて身を乗り出した私のお腹に回された腕がほんのりと力が入る。星屑の街。あの光の川があつた所だ。

あそこに長くいると何かを奪われるらしく、私はもののみごとガン Dock のいう『成長』を奪われた。じゃあ一生小さいままなのか？という疑問が浮かぶがどうやら『流れ星』を作ると奪われたものが少しずつ返ってくるらしい。

流れ星に三回お願いすればいいのか、と聞いたらノアールはそうかもねと笑った。

それよりどうしたガン Dock。顔色が悪いぞ。体調が芳しくないのではないか？さっきノアールが笑った気配がしたがまさかそれでは

あるまい。

ノアールの笑顔は優しくてあつたかくて眠たくなるようなそんなもののだから。

ぽわんとした気持ちにゆられイチルがこてんと頭をノアールの胸に預けると大好きな掌が頭におりて。ふにやと笑った。がすぐさまはつとする。

ほのぼのした雰囲気居づらかったのかなんのかは知らないがガンドックがかたりと立ち上がったからだ。

ノアールが不機嫌そうにガンドックを睨めつけるが、鼻であしらわれた。

「<sup>シャロン</sup>神官から伝言だ。仕事を振り分けるから来いだよ」

くるりと背を向け食堂をだらだらと出て行ったガンドックを見送って私はノアールを見上げた。ノアールの綺麗な青色の眼も私を見下ろしている。<sup>シャロン</sup>神官からの呼び出しということは・・・、

くるつと膝の上で方向転換をして

「はつしごとー!」

「お仕事デビューだね」

ぎゅっとノアールに抱きついた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1585z/>

---

短編集やシリーズやらやら

2011年12月7日22時52分発行